

水島 メモリーズ

高梁川の水害編



昔は2本でした



2018(平成30)年7月8日の真備町の様子(写真：高田昭雄)

2018(平成30)年7月の西日本豪雨は、岡山県・広島県・愛媛県など、広い範囲に大規模な被害をもたらしました。岡山県倉敷市の真備地区では高梁川水系小田川の堤防決壊により大規模な浸水が起き、市町村別の死者数が最多となりました。西日本豪雨による全国の死者数は237人で、そのうち真備地区が51人を占めます。愛媛県でも、肱川の氾濫によって西予市や大洲市に大きな被害が出ました(内閣府「平成30年7月豪雨による被害状況等」)

西日本豪雨による大水害

目次

西日本豪雨による大水害	p3
開発と災害	p6
水害の歴史と教訓を未来へつなぐ	p10
地域カフェとみずしま財団について	p14



真備公民館川辺分館に飾られたトロフィー。これらも水没した(写真：山口百香)

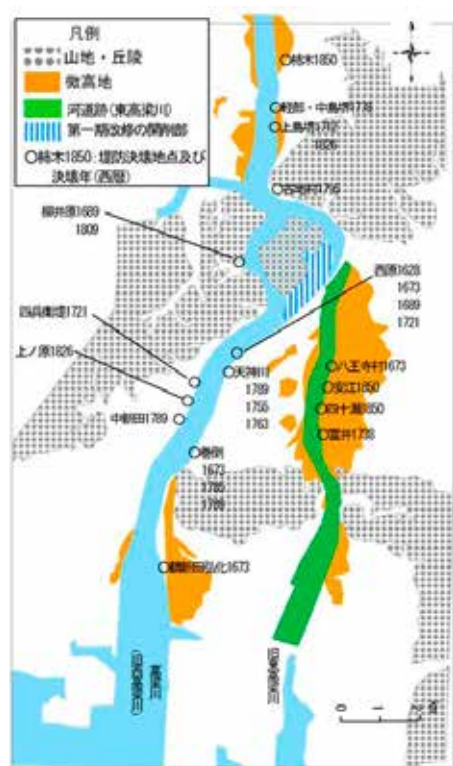
ついで(平成31年1月9日「7.00現在」)。中央防災会議防災対策実行会議平成30年7月豪雨による水害・土砂災害からの避難に関するワーキンググループ「平成30年7月豪雨の概要」。

真備の水害は「バックウォーター現象」によるものでした。高梁川の増水によって、支流の小田川から流れ込む水が阻まれ、行き場を失ったのです。8か所の堤防が破堤し、1200ヘクタールが最大約5・4メートル浸水してしまいました。

この真備の水害に大きな

影響を与えているのが、100年前に行われた高梁川の改修工事です。1910(明治43)年から1925(大正14)年にかけて、内務省はそれまで倉敷市で東西に分かれていた高梁川のうち東高梁川を締め

切り、川幅の広い西高梁川に統合する大改修を行いました。この改修には、倉敷の地元経済界の意向も大きく作用していたようです(若狭勝編著『熊沢蕃山と低水思想と高梁川外水氾濫(真備水害)——地理



東高梁川の河道跡(緑色)

(出典：国土交通省ウェブサイト

https://www.mlit.go.jp/river/toukei_chousa/kasen/jiten/nihon_kawa/0706_takahashi/0706_takahashi_01.html)

学的分析』(2020年)。

東高梁川が締め切られてきた廃川地に、後に水島のまちがつくられました。アジア・太平洋戦争中に名古屋から三菱重工業が進出してくることになり、それにもなつて市街地が整備されたためです。そのことが戦後のコンビナート開発の基盤にもなりました。この高梁川の改修がなければ、水島は存在しなかったわけです。

100年前の高梁川改修、80年前の水島の市街地造成、そして5年前の真備

の水害は、実はこうして深くつながっているのです。



1918年(大正7)年の高梁川平面図。赤い線は当時の工事箇所を示す(出典：高梁川東西用水組合編『高梁川東西用水組合設立100年のあゆみ』高梁川東西用水組合、2016年)

開発と災害

100年前の高梁川の改修は、川辺村(現在の倉敷市真備町川辺)に大きな被害を与えた。1893(明治26)年の水害がきっかけになっています。

そもそも高梁川は水害が多い川でした。その原因は、上流域で行われてきたタタラ製鉄にあります。映画『もののけ姫』にも出てくる古くからある製鉄法です。問題となるのが、鉄穴流かんたなと呼ばれる砂鉄の採取法です。これは、砂鉄を比較的多く含む山を崩して、土砂を水路に落とし、流下させることで比重の軽い土砂と重い砂鉄を分離する方法

です。しかし、含まれる砂鉄は多いといっても比率としてはわずかですから、大量の土砂が捨てられ下流に流されます。土砂は堆積して川底を高くし、水害の原因をつくったのです(上楯武「鉄穴流による地形改変」岡山県古代吉備文化財センターウェブサイト、2013年)。また、製鉄に要する木炭製造のための伐採も手伝って、山林が荒廃していたことも土砂流出の原因でした(倉敷市史研究会編『新修倉敷市史 第五巻 近代(上)』倉敷市、2002年、681〜683頁)。

高梁川下流域に明治以降最大

といわれる被害を与えたのは、130年前の1893年10月に起きた水害です。とくに川辺村の被害は壊滅的で、集落のほとんどの家が流失・倒壊し、54人の住民が溺死したといえます(倉敷市総務課歴史資料整備室「明治26年の水害」倉敷市ウェブサイト)。この地域は2018年の西日本豪雨でも大きな被害を受けました。

明治期の倉敷平野は、しばしば水害に見舞われました。1893年の水害と並んで特筆されるのが、1884(明治17)年8月に現在の水島を襲った高潮の被害です。満潮時に台風が通過して



1893(明治26)年の水害
岡山県窪屋郡中洲村大字中島 宮内庁書陵部図書寮文庫所蔵 B9・32・1



水没した福田新田の被害地図
 1884(明治17)年 岡山県備前国児島郡沿海村被害実況見取絵図(福田部分のみ)
 岡山県立記録資料館所蔵 明治期岡山県公文書 C39-11

高潮を引き起こし、さらに暴風が吹きつけて高波を発生させました。その結果、海岸堤防が破壊されて、福田新田5か村

(南畝・北畝・中畝・東塚・松江村。倉敷市北畝・中畝・南畝・東塚・松江付近)が波にのみこまれ、536人が犠牲になりました。そのうち身元不明の256人の遺体は被災地を見下ろす丘に埋葬され、「千人塚」と呼ばれる供養施設が設けられています(前掲『新修倉敷市史 第五巻近代(上)』676～678頁。倉敷市総務課歴史資料整備室「明治17年の高潮」倉敷市ウェブサイトに)。

福田新田は、江戸時代末期の干拓によってつくられました。

前述した河川改修より前のことですから、東高梁川の河口部が干拓されたのです。

そもそも干拓地は低地ですから、水害に弱いという特性があります。また下流で干拓が進み、干拓地を川の water からまもるために堤防をつくと、今度は川底に土砂がたまりやすくなります。これがまた水害の原因をつくりだすのです(高橋一康「近世における高梁川の河床変動——その時期と原因について」『人文地理』第23巻第6号、1971年)。

明治期におけるこれらの水害は、砂鉄採取、森林伐採、干拓などの人間活動と密接に関係して

います。人間が環境を大きく改変する開発行為は、災害を誘発する面をもっているのです。1954(昭和29)年につくられた高梁川流域連盟も、その設立趣意書で「水害の頻りしきなる」ことに警鐘を鳴らしていました。

アジア・太平洋戦争後のコンビナート開発によって、水島で深刻化した大気汚染公害も、同じ視点から見ることができます。江戸時代の干拓、明治～大正期の東高梁川の廃川、戦時中における工業化・都市化の開始、そして戦後のコンビナート開発——これらは相互に関連しているからです。

水害の歴史と教訓を未来へつなぐ

水害をなくすため高梁川の改修をしたのに、なぜ再び水害が起こってしまったのでしょうか？ 真備地区の郷土史家で、「まび創成の会」（真備の水害の歴史や原因を研究するため2019年に結成）の加藤満宏さんに聞いてみました。

加藤さんは『真備町（倉敷市）歩けば』（小野克正・加藤満宏・中山薫著、日本文教出版、2016年）の著者でもあります。

加藤さんは「川は下流に行くほど幅が広がるのが自然

なのに、2つの川を1つにしたことに無理があった」と教えてくれました。もとの川筋は自然な流れだったはずですから、それを変えてしまう問題が生じるのではないのでしょうか。

現在、西日本豪雨を受けて、真備緊急治水対策プロジェクトとして小田川と高梁川の合流点をつけかえる工事が進んでいます（2018〜2023年度）。これによって小田川の「バックウォーター」の影響を軽減できるそうです。

しかし、加藤さんとともに「まび創成の会」で活動する森脇敏さんは、懸念を表明します。「真備でも、また水害が起こるかもしれません。だからこそ地域の歴史を学んで、災害への心構えをつくるのが大切です。ハード面の整備だけでなく、平時の備えや避難のあり方、そして宅地開発についても再検討することが必要でしょう」。

真備町は2005（平成17）年に倉敷市に編入合併されましたが、それ以前から水島



小田川と高梁川の合流地点 1991（平成3）年10月8日 安藤弘志氏撮影（倉敷市歴史資料整備室蔵）



旧東高梁川の廃川地にクラレ酒津工場が建設された。現在はイオンモール倉敷になっている土地も廃川地である 1965（昭和40）年9月18日 安藤弘志氏撮影（倉敷市歴史資料整備室蔵）



森脇敏さん 水除堤(金刀比羅宮)にて、設置した伝承看板の説明(写真：山口百香)



2022(令和4)年8月10日 倉敷市福田公民館主催、みずしま地域カフェ共催企画にて郷土史家の西祐太さんと一緒に千人塚を歩く(写真：山口百香)



2023(令和5)年5月21日、真備公民館川辺分館。水島から出て、初めて出張開催した地域カフェにて、郷土史家の加藤満宏さんから話を聞く(写真：山口百香)

臨海工業地帯で働く人たちのベッドタウンとして、多くの「新住民」が流入してきました。水田をつぶして宅地が造成され、水害に弱い地域に人口が増えていったのです。加藤さんはいいます。「公害のない田園地帯で、自然が豊かだからというところで真備に移り住んできた人たちが、西日本豪雨の被害にあってしまったんです」。

地域の歴史を知ってほしいという思いから、「まび創成の会」は2023(令和5)年3月、真備町岡田のお堂2か所に、QRコードつき伝承看板を設置しました。江戸

時代に岡田藩が築いた堤防「水除堤」の上にある、薬師堂と金刀比羅宮に1つずつたてられています。

2018年7月の大水害によって、真備が古くから水害常襲地であったこと、繰り返される大水害の教訓を後世に伝えるために先人たちが石碑に刻んだ史跡が町内のあちこちにあることがあらためて住民の間で認識されました。100年前の高梁川の改修で、水除堤は役割を終えたと考えられ撤去されていきましたが、伝承看板がたてられた上記2か所は、撤去されず残った場所です。

た。今回はその堤防すら超えた水害だったのです。

日本は災害列島ともいわれます。地域の防災力を高めるためにも、こうした地域の歴史をひもとくことが大切ではないでしょうか。

地域カフェについて

戦争、地域開発と公害など「困難な過去」にも目を向けながら、水島の歴史を掘り起こすとともに、地域の新しい魅力を発信するための冊子です。みずしま財団が2021年度から取り組んでいる「みずしま地域カフェ」で得られた情報をもとに作成されています。地域カフェは地域の歴史について学び、将来のまちづくりの方向性などを語り合う場です。ぜひご参加ください。



みずしま財団について

みずしま財団は、正式名称を「公益財団法人水島地域環境再生財団」といい、2000年3月に、水島地域の環境再生・まちづくりの拠点として設立されました。

住民を主体に、行政・企業など水島地域の様々な関係者と専門家が協働する拠点として、よりよい生活環境を創造する活動を展開していくために、調査活動をはじめ、学びの場づくり、人とのつながりづくり、そして公害の経験の継承と公害患者支援などを行っています。2022年10月、ミニ資料館「みずしま資料交流館」を開設しました。



1893(明治26)年 岡山県浅口郡水害見取図
岡山県立記録資料館所蔵 明治期岡山県公文書 C39-17

表紙写真 : 真備町岡田に残る水除堤。薬師堂がたっている(写真: 山口百香)
裏表紙写真: 福田公園の東にある千人塚(写真: 山口百香)
文 : 林美帆(みずしま財団)、除本理史(大阪公立大学)
協力 : 語り部ネットワークまび、まび創成の会、倉敷市福田公民館、西祐太、高田昭雄
デザイン : 山口百香(Myu dear,)
発行日 : 2023年7月
発行 : 公益財団法人水島地域環境再生財団・みずしま資料交流館(あさがおギャラリー)
〒712-8033 岡山県倉敷市水島東栄町11-12 TEL: 086-440-0121

地球環境基金の助成を受けて作成しました

会員募集

『水島メモリーズ』が届くみずしま財団の年会費は **3,000円(個人)**
みずしま財団の活動をご支援ください(税控除対象)

ゆうちょ銀行 店番一三九店(イチサンキョウ店)当座 口座番号 0036797
どうぞよろしくお願いたします



みずしま財団
Webサイト



DATA





百巖池

昭和十八年八月二十五日

岡山縣立歴史博物館
岡山縣立歴史博物館
岡山縣立歴史博物館

この池は、古くは「百巖池」と呼ばれ、その名は、池の周囲に百の巖があるからである。池の水は、清冽で、夏になると、涼しい。池の周囲には、多くの樹木があり、緑豊かな環境に恵まれている。池の水は、古くは「百巖池」と呼ばれ、その名は、池の周囲に百の巖があるからである。池の水は、清冽で、夏になると、涼しい。池の周囲には、多くの樹木があり、緑豊かな環境に恵まれている。